

試論農書的性質以及其他影響力

中 林 廣 一

本篇主旨在於探討中國的農書有著哪些性質。儘管在過去的研究中農書被廣泛使用，但很難說在使用農書時有考慮到它原有的性質。本篇探討農書的性質，並導出階層性·啟蒙性·意識形態性等三種性質。雖然在因編輯農書以及讀者被限定為知識分子的情況下，而有了這三種性質，但由於農書受這個情形的影響，導致農書的內容和實際的農務·農民的現實狀況不同。實際上農民也從事非農業的工作，且女性也從事著農務的工作，但在農書裡並沒有記載這些實際情形。根據以上的研究結果，農書的內容未必真實記載著農業和農民的現實狀況。

濾過された存在としての農業・農民

中 林 広 一

はじめに

農業の歴史にまつわる史料として誰しもが思い浮かべるものに農書がある¹⁾。前近代中国であれば『齊民要術』や『農政全書』などの名がその代表として挙げられるが、これらは社会経済史研究において高い頻度で活用されている。

ただ、実のところ、これらの農書を祖上にあげて史料としての性格についてなされる考察はごく少数の成果に限られており、またそうした成果を基礎にしつつ農業・農民・農村といった諸要素について論じる取り組みに至っては皆無と言ってよい。中国農業史という研究分野は長年にわたる歴史とそれに基づく厚みを持っているだけに、こうした研究の空白が存することには意外な思いを禁じ得ない。

とは言え、このような状況をそのまま放置することは研究の発展にとってマイナスにしかならず、初歩的なものであれ考察を試みることは一定の意義を持つ。そこで本論ではこうした立場から農書が持つ史料としての側面を見つめなおし、その性格を検討してみたい。史料の性格を明確にすることで、農書が持つ有効性と限界を把握することが可能になり、またそれは農業史との向き合い方を再考する契機にもなりえよう。

以下、本論に移っていく前に、中国の農書が従来の研究においてどのよ

うに論じられていたのか改めて確認しておきたい。上述の通り、農書はその重要性もあって様々な研究において利用されてきたが、その利用は以下の傾向を持つものであった。

1点目は農書の内容に対する着目である。そこに記された農業技術や作物の品種、あるいはそれらの内容を提示する書式などが検討の軸に据えられており、農書に関する研究としてはオーソドックスなものと言えよう。こうした研究は枚挙に遑が無く、日本の研究だけでも膨大な数に上る。代表的なところでは天野元之助氏による諸研究²⁾や『齊民要術』にまつわる西山武一氏の整理・解説³⁾が挙げられ、また宋元期に限ってみても農書を広く取り扱った周藤吉之氏の研究⁴⁾や陳勇『農書』を検討した大澤正昭氏の成果があるが⁵⁾、そこでは内容に対する分析を通じて史料としての特徴を明示している。

また、農書を総合的に捉えようとする立場からは、その編者に対しても高い関心が示されている。例えば、寺地遵氏の研究は陳勇の文章に安定性を求める農業観を見出し、そこに陳勇『農書』の独自性を求めている⁶⁾。大澤正昭氏はその生涯について断片的な記載しか残されていない陳勇について考証を重ね、陳勇の居住地や自身が所有していた耕地の種類を推測する⁷⁾。編者の周辺を洗い出していくこうした作業は記述の内容に対する信憑性を判断する際にも裨益するものであり、その意義は大きい。前掲の各研究はいずれもこうした形での考察を行っているし、中には章楷氏の著作のように農書とその編者に特化させたものもある⁸⁾。こうした関心の持ち方を2点目の傾向として挙げておく。

最後に版本への着目を挙げておきたい。版本の系統を明らかにする作業は、言うまでも無く史料として活用するための基礎的作業として位置づけられる。王毓瑚『中国農学書録』や天野元之助『中国古農書考』は農書の解題書として農業史研究者にとっては座右の書とすべきものであるが⁹⁾、

特に後者は天野氏が倦むこと無く取り組んだ版本の比較対校の成果であり、重視すべき版本の系統についても検討されている¹⁰⁾。

農書に関する研究はこれらの方向性の下で進展してきたが、その一方で農書そのものの性格に踏み込んで検討を加えようとする動きは低調であったと言える。個々の農書に関する知見は得られるものの、そもそも農書とはどのような意図をもって記され、どのような人々が繕くものなのか、そうした点について私たちが知見を得る機会は思いのほか少ない。

無論、そうした研究は皆無ではない。近年では宮紀子氏による一連の成果が元代に農書が刊行された政治的背景に踏み込んだ考察を行っている¹¹⁾。本研究を通じて私たちは農書を編纂し、頒布する意図が窺いしれ、またそれらの内容は農書の性格を考える上で大いに示唆に富む。

また、市村導人氏は先行研究における農書の普及に関する検討の不十分さを指摘し、農書の内容と農民との間に立つ知識人に着目した研究を行う¹²⁾。特に知識人にとっての農書の位置づけに着目して検討の手がかりとし、また『斉民要術』を始めとした各種農書の所蔵状況を明らかにしたその成果は、農書に対する評価の低さや決して芳しくない流通状況を浮き彫りにし、普及の実態に迫ろうとしている。

一方で、大澤正昭氏の論考は農書の内容からその性格に迫っていくものである¹³⁾。そこでは農書に見える農作物の売買に焦点を当てた検討を通じて、時代の変遷と共に販売を強く意識した農業や作物に関する記述が省略・削減されていく傾向が示され、またその背景として売買を「末業」として否定的に捉える知識人の感覚が農書に反映されている点を指摘する。

このように農書の性格を考えていく上で注目すべき見解は各種論考に見出すことはできるし、筆者もかつてこの点について言及したことがあるが¹⁴⁾、拙稿も含めてこれらの指摘が部分的・個別的なものにとどまっていた点は否めない。そこで、本論では史料としての農書を主たる検討対象

に据え、加えて農業史研究における農書の位置づけを再考することとする。

1. 農書の周辺

以下、具体的な検討を進めていくに当たり、その前提として農書がどのように利用されていたのかを確認しておくところから始めていきたい。いつ・どこで・誰が・どのように農書を利用していたのか、農書をめぐる5W1Hとでも称すべきこれらのことについて問われると、私たちは思いのほか回答に窮するのではなかろうか。筆者もこうした状況が整理された研究については寡聞にして知らない。

しかし、農書の性格に焦点を絞った本論の立場からすると、その利用にまつわる細部を把握しておくことは極めて重要だと言える。なぜならば、こうした知見は、編者が抱いている意図や想定している読者層を推測する際に重要な手がかりになるからである。そして、書き手・読み手それぞれに対するイメージが明確なものへと変じていけば、それは農書の持つ性格の理解にもつながってこよう。

そこで、まずは農書が活用される状況から探っていきたい。読者はどのような要請の下で農書を利用していたのか。こうした観点から史料に目を向けると2つの動機に対する言及が目立つ。1つは荒廃からの復興を意識した利用である。陳勇『農書』汪綱跋に見える、金軍との交戦で荒廃した高沙（淮南東路高郵郡）の復興への言及はこうした利用の典型である¹⁵⁾。

ただ、農書の需要は戦災のような非日常的な事態に限られるわけではない。例えば、利州路転運使を務めていた李昉は「多く播種を誦会せ」ざる民の姿を見かけたことを契機として、『齊民要術』・『四時纂要』などの農書を監督官に頒布して勸農に役立たせるよう訴えている¹⁶⁾。

こうした勸農を目的とした農書の活用は陳勇『農書』に対しても行われ

ていた。陳勇に『農書』を託された知真州の洪興祖は「儀真勸農文」を付して各地に本書を頒布したというし、「守令は勸農を以って職と為す」¹⁷⁾と述べる朱抜¹⁸⁾がいかなる意図の下で本書を刊行したかも言わずとされている。

このように勸農が意識される中で農書の刊行がなされる事例を踏まえるならば、その利用は私的な必要に迫られるケースよりは、為政者としての立場からなされた利用の方が目立つと言えよう。元代の三大農書と呼ばれる『農桑輯要』・王禎『農書』・『農桑衣食撮要』の刊行が元朝の政策と密接な関係の下にあったことは先に触れた宮氏の議論において明らかであるが、こうした関係性も勸農という目的が強く意識されてのことである¹⁹⁾。

以上に示した動機から、農書の持つ公的な性格の強さが見てとれるが、この側面について農書を手に取る主体という面からも考えてみよう。

表1は陳勇『農書』の刊行にまつわる出来事を年表としてまとめたものである。本表から窺えるように陳勇『農書』の刊行のきっかけは陳勇と知真州洪興祖の交流に求められる。つまり、農書の刊行に至るまでの過程に

表1：陳勇『農書』をめぐる人の動き

年 代	出 来 事	出 典
紹興 19 (1149)	陳勇、洪興祖を訪問して陳勇『農書』を託す	陳勇『農書』洪真州題後
紹興 19 (1149) ?	洪興祖初刻本、刊行	陳勇『農書』洪真州題後
紹興 24 (1154)	陳勇による改稿	陳勇『農書』後跋
	朱抜、陳勇『農書』(陳勇改稿本?)を入手	陳勇『農書』朱抜跋
嘉定 7 (1214) 2月	朱抜刊本、刊行	陳勇『農書』朱抜跋
嘉定 7 (1214)	汪綱、陳勇『農書』(朱抜刊本?)を入手	陳勇『農書』汪綱跋
嘉定 7 (1214) 12月	汪綱刊本、刊行	陳勇『農書』汪綱跋

は知識人間の直接的な交際が存在していたことになる。

ところで、陳旉による後跋によれば、この初刻本は、その内容に洪興祖の手が入っており、陳旉には大いに不満を抱かせるものであったようである。陳旉は後に自身で改稿を施しているが、朱抜や汪綱が入手したという陳旉『農書』がそれぞれこの改稿本なのかを確認することは叶わない。ただ、初刻本が刊行された段階で陳旉が七十四歳であることを踏まえるならば²⁰⁾、官僚としての活動時期が十二世紀後半から十三世紀前半であった朱抜と汪綱が陳旉と交流を持っていた可能性は低い。とするならば、朱抜刊本と汪綱刊本については、編者との直接的な交流ではなく、知識人間のネットワークを通じて入手した農書に基づいて刊行された可能性を考えるべきであろう。

現に知識人のネットワーク上を行き交う農書の存在は史料上において散見される。例えば、曾安止は自身の手になる『禾譜』をめぐって蘇軾と交流を持ち²¹⁾、陸游の詩には「耒陽県令曾君寄禾譜農器譜二書求詩」なるものが見られる²²⁾。この曾君とは『農器譜』の編者として知られる曾之謹のことであるが²³⁾、陸游は曾之謹から自身の手になる『農器譜』と祖先の曾安止が撰した『禾譜』を贈られており、この詩はその際陸游が返礼として作ったものである。

これらのやりとりは知識人の間で農書をめぐるネットワークが形成されていたことを窺わせるものであり、とりわけ農業に強い関心を抱いていた知識人にとってはこのネットワークが重要な情報源になっていたと推測される。朱抜や汪綱が陳旉『農書』を入手し、刊行に漕ぎ着けた背景にもこうしたネットワークの存在を想起することは決して荒唐無稽ではなからう。

無論、このネットワークは官僚のみに限定されたものではなく、在野の知識人に対しても広がりを持っていた。例えば、陳旉は『農書』の序において『齊民要術』・『四時纂要』について「迂疎にして用に適さざるの比」

と評しているが²⁴⁾、こうした評価もこれらの農書を実見する機会があればこそ可能なものである²⁵⁾。このように農書を目にする機会はネットワークを通じて知識人一般に開かれており、また必要に応じて活用されていた²⁶⁾。

2. 農書の持つ性格

前章において農書の利用をめぐる細部を確認したが、そこから見えてきたことは官・民を問わない知識人との関わりである。そして、この関係性は農書の性格を考える上で一定の意味を持つものでもある。それではこうした性格とはどのようなものであったか。本章では農書の性格を検討していきたい。

さて、前章の内容を起点として考察を進めていくと、農書について3つの性格を導き出すことができる。以下、これらを順に述べていくが、まずは利用の実態と最も密接に関わってくる性格として階層性を挙げておこう。上述したように、農書の編纂・利用の主体は知識人に限定されていたが、そこから農書と特定の階層との間に生じていた親和性が見出される。

そして、それは視点を変えると、実際に農作業に従事する農民と農書のつながりが希薄な状況を示すものでもあった。現に前章で確認した史料において農民が直接農書から農業技術を学び取る事例は皆無と言ってよい。

このような利用状況の背景には農村における識字率の低さを考えることが妥当であろう。宋代の農民がどの程度の識字能力を有していたか、それを示すデータで信頼に足るものは存在しないが、参考までに20世紀前半に日本の機関が行った農村での聞き取り調査から関連するやりとりを抜き出してみよう。例えば、「村の男はどれ位字が読めるか」との質問に対して「一割位」との回答があり、手紙や正月の春聯を作成する際、あるいは

葬式などの機会に文字をつづる必要が生じると、農民は筆記能力のある村人を頼っていた²⁷⁾。

やりとりの中には識字者の割合を8割と高く示すケースもある。ただ、その内訳は「姓名位書ける者九割、新聞を読める程度の者3割、小説を読める者は不明」とするものであったから²⁸⁾、識字能力とはいっても生活に必要な最低限の文字を知るにとどまる農民が大半を占めていたと考えるべきであろう。

また、上記の回答には新聞や小説に対する言及もあるが、「青年たちは全然読書しないか」という問いに対して「常識問答、国文等を少しは読む者がある。中には三国志、武俠小説等を読む者もあるが、高級小学校卒業ぐらいでは意味が十分通じない。」との回答がなされたことを踏まえると²⁹⁾、長文の文章を目にしてつかえることなく文意を解することのできる者は決して多くはなかったと推測される。

加えて触れておくと、「識字者も家には何も読まぬか」と問われて農民が「何も読まぬ。読む暇なし。故に次第に字を忘れる。」と回答している点にも触れておきたい³⁰⁾。何らかの形で文字を学ぶ機会があっても、日々の作業に追われて学習後にその内容を反芻する習慣を確立できなかったことがここから窺える。当時の農民が反復学習によって知識を定着させる機会に恵まれておらず、これが識字状況に大きく影響していたと見てよい。

無論、以上の内容をもって宋代の農民の識字能力に対する証左とすることは慎まねばならない。ただ、清代における民衆の識字能力に対する張朋園氏の指摘に従うならば、近代的な教育制度が導入される前の社会においても上述の状況はさほど変わらなかったと考えられる³¹⁾。少なくとも宋代における農民の識字能力が民国期のそれより高かったことを窺わせる史料は見受けられないことから、差し当たりここでは宋代の農村においても

同程度の識字率を想定しておきたい。

ともあれ、農村の識字層においてその大半が自身の名前を読み書きできる程度の水準にとどまっているのであれば、農民が農書を読みつつ自身の農作業の参考にするという状況は考えづらい。また、手紙や葬儀・婚礼に関する文をしたため、契約文書の内容をきちんと判読できる程度の運用能力を備えた者が一部に存したにせよ、日常的には用いない専門的な用語が散りばめられた農書を読んでその内容を正確に理解することは困難であったのではなからうか。これらの点を考慮すると、農書を利用する場面に農民が登場しないことも十分に首肯できる。

それでは、現場の農民の間で用いられた農業技術はどのように獲得されていたのか。残念ながら、そうした点に触れる史料は見受けられないが、自身の家族からなされる口伝や経験知の積み重ねによって習得していたと推測される。以下の問答はそうした知のあり方を想起させるものである³²⁾。

あなたの家では農耕その他家事について誰が指図するか＝父

あなたは指図しないか＝指図する時もある

どんな場合か＝例えば朝どこへ仕事に行く、朝食は何にするか等

そういうことはあなたが毎日指図するか＝大体毎日やる、しかし毎日父と相談してやる

ここでは耕作の方針や作業内容に関する決定権は父親、すなわち家長に属していることが読み取れ、息子が指示を出す場合にも父親との相談が必要とされている。日常生活においてこうした人間関係が基盤となっているとするならば、農民が幼少期から青年期にかけて農事の補助を命じられた際にも、その細部にわたって父親からの指導を受けていたことは想像に難く

ない。無論、家族外の人々との間で得た情報、自身の取り組みより得られた経験を受けて農業技術が向上するケースも想定しなければならないが、いずれにせよ一般的な農民の日常に農書が介在することは無かったと見てよい。

ところで、農書を手に取る知識人と農書そのものには縁が無い農民という構図は、農書の持つ啓蒙性と密接な関わりを持つものである。前章で示した勸農を目的とする農書の配布も、知識人が農書から得た知識を農民に伝えるやりとりが期待されてのことであろうが、こうした関係性が成立するのも農書に普及を目的として高水準の技術が掲載されているからこそである。

この啓蒙性こそが2つ目の性格であるが、農書の内容に目を向けてみると技術の普及を強く意識した記載はしばしば見受けられる。例えば、耕起具である鋒について王禎は「近世の農家、此の器を識らず、亦た名も知らず。茲に特に其の功用を録し、知りて廃すべからずと為すなり」と述べ³³⁾、また除草具である耘盪についても「今此の器を睹るに、預め伝えて以て彼の用を済いざるを惜しむ。茲に特に図録し、愛民者の播きて普法と為すを庶う」と有用な農具が一般に知られていない現状を嘆き³⁴⁾、それらを普及させるべく紹介を行う。

また、王禎の記述には使用される農具の地域性に言及し、そこから生じる偏差の是正を訴えるものが散見される。耙・耨・撻（耕地の碎土・鎮圧作業で用いる農具）にまつわる記述や鏟（犁に装着するスキ先）・耨鋤（除草具）についての項目では、地域間で使用される農具の種類にばらつきがあることを指摘し、それを補うべく農具の情報を提供している³⁵⁾。

以上に見る記載は、農書の編者にとって読者は農業技術や農具に関する情報が十全に備わっていない存在としてイメージされていたことを前提として成り立つものである。そして、そうした状況の改善を目的として農業

にまつわる様々な情報を提示する側面が農書にはあったと言える。ここに農書に備わる啓蒙性を見出すことができよう。

これらの諸点に加えて、3点目の性格としてイデオロギー性を挙げておきたい。農書の編者が知識人に担われていることは先に述べたが、この知識人には儒教的な価値観が備わっていたことは言うまでもない。そして、こうした儒教的価値観は当然農書の内容にも反映されていたが、こうした特徴をここではイデオロギー性と呼んでおく。

イデオロギー性を構成するものとしては、例えば農本商末・重農抑商の価値観がある。生業として農業を重んじ、商業を蔑む感覚が儒教には備わっているが、こうした価値観を背景に持つ者が編纂に当たれば、当然農書の内容には商業的な要素に否定的な記載が含まれることとなる。

この点については上述の大澤氏の研究が実証的に示すところでもあるが³⁶⁾、実際に農書に見られる内容からも確認しておこう。差し当たり、典型的な記述として王禎『農書』農桑通訣・勸助篇に見える記述を挙げておく³⁷⁾。

後世勸助の道明るからざれば、其の民往往にして本を捨てて末に趨く。故に諺に曰う、貧を以って富を求むるに、農は工に如かず、工は商に如かず、綉紋を刺すは市門に倚るに如かず。此の説一たび興れば、天下の民、男子耒耜を棄てて販鬻に争い、婦人は機杼を捨てて歌舞を思ふ。遊に墮し末もて作し、習いて以って俗を成す。

ここでは『史記』貨殖列伝・『漢書』貨殖伝に見える諺を引用しつつ、農業を軽んじ、商業に手を染める風潮に対して警鐘が鳴らされている。とりわけ注目すべきは、商業に対して農業よりも大きな利益を獲得できる生業と見なす認識が確立していることであろう。そうした現状認識が知識人の

間で共有されているからこそ、民が商業に傾き、農業から遠ざかっていく傾向を押しとどめるべく編者の筆勢は一層強まっていく。

加えて、農書に男耕女織の価値観が反映されていた点にも触れておきたい。農業にまつわる作業は実に多岐にわたるが、農書の記述においては各種作業と性別とに対応関係が生じていた。例えば、王禎『農書』に見える「蚕繰の事、天子の後妃より庶人の婦に至り、皆執る所有り、以って衣服を供す」という記述は養蚕・織布に関する作業を女性に関連付けた形で述べるものである³⁸⁾。

一方で農作業そのものに女性が関与する記載はほとんど見られない。王禎『農書』には数多くの挿図が設けられているが、そこで農作業に従事する農民は例外なく男性である。稀に女性も登場するが、そこでは家畜の飼育・食事の運搬といった農作業以外の労働、あるいは農作業を行う男性を補助する労働であり³⁹⁾、農具を手にする女性の姿を見ることはできない。このように儒教の持つ男性観・女性観もまた農書には影響を及ぼしており、こうした点からも農書に含有されていたイデオロギー性を看取することが可能であろう。

3. 異なる視点・異なる史料から見える農業・農民の姿

ここまで農書に備わっている性格について検討してきたが、一方でそこに記される農業のあり方や農民の姿にはどの程度現実が反映されていたのか確認しておく必要はあろう。なぜならば、農書を編纂する主体と農書の各種性格との間に深い関わりが見られ、その結果編者が様々な制約の下にあることが明らかになった以上、農書の内容と現実の農業・農民との間には何らかの乖離を想定することが自然だと言えるからである。そこで、本章では上述した農書の性格に即した形でこうした乖離について検討を行っ

ていきたい。

さて、前章では農書の持つ階層性について言及した。すなわち、農書の編纂や利用の主体は知識人に限定されていたが、この特徴は、当時の農民による行動や農民の持つ感覚が農書の記述には反映されにくい状況を作り上げていく。

ただ、農書にも稀に実際の農業・農民の様子が描かれることはある。2つほど事例を挙げておこう。陳勇『農書』天時之宜篇には「建寅の月朔を以って始春と為し、建巳の月朔もて首夏と為す」と独自の暦に基づき農業を行う農民の姿が記されている⁴⁰⁾。ここで示されているのは北斗七星の柄を構成する星々が日没直後に寅の方角を指す時期を正月と見なす暦であり、これは宋朝が用いていた暦法による暦とは異なる。

また、陳勇『農書』祈報篇では農事にまつわる儒教の祭礼について「今の農に従事する者、類ね然ること能わず」とそれが実施されていないことが述べられている。仮にこの祭礼が執り行われていたとしても、陳勇はそれをいい加減な祭礼を無理に行っているにすぎないと喝破する。農村ではむしろ「春秋二時の社祀」すなわち土地神に対する祭りこそ真摯に取り組まれており、儒教に基づく「祈報の礼」は取るに足らないものとして扱われている様子が描写されている⁴¹⁾。

このように書き手の思い描く農のあるべき姿とは異なった感覚・志向を持つ農民が現実には広く見受けられていたようである。そして、そこからは農書の記載と現実の農業・農民との間にあったズレを感じ取ることができるが、こうしたズレも階層性があるからこそ生じたものと考えられるべきであろう。

ちなみに、上記の事例のように現実の農民の姿が農書に登場するのは、いずれも編者にとって非難の対象となる行為がなされた状況に限定される。上記の例に即して述べれば、前者については「殊に陰陽に消長有り、気候

に盈縮有るを知らず。冒昧以って事を作せば、其れ克く成有らんや」と曆に対する農民の無知や軽率さが陳勇によって詰られている。後者についても各種災害や飢饉・民衆の流亡の原因を「祈報の礼を失い、神を置しくし祀を乏つ」ことに求め、儒教の祭礼の持つ重要性が強調されている。

これらの事例は、農村社会の実像は非難の対象という形をとらないと言及の対象となりにくい農書の傾向を指し示すものでもある。言わば、現実の農業・農民の姿は編者のフィルターを通して濾過されており、それらが読者の視界には入ってきづらい状況がここにはあった。階層性はこうした状況へと農書を導く要素の1つであったと言って良い。

以上のように農民の持つ感覚や農村での生活には農書の内容とかけ離れた部分がある。そして、同様に農書に示された技術と現実の農作業の間にも大きな隔たりがあったことには留意が必要であろう。

先に示した啓蒙性という性格は、こうした差異について考える際に重要な意味を持つ。農書の編者には世間一般に普及していない技術や農具についてその情報を読者に伝えようとする意図があると先に指摘したが、この点から推し進めて考えてみると、農書に掲載されたという結果そのものが、当該の技術・農具の持つ先進性の表れということにもなる。

さらに推論を一步進めると、農の現場においてはこうした先進性が十分には獲得されておらず、低水準の技術や知識の下で農作業に取り組みれていたとする農業像がここに浮かび上がってくる。上述した「播種を誦會せ」ざる農民が多く見受けられたのもこうした状況と深く関わるし、また同様の状況を窺わせる事例は他にも散見される。例えば、陳勇『農書』には、除草した雑草を緑肥として活用する技術について述べたくだりで「今の農夫此れ有るを知らず、乃ち其の耘除の草を以って他処に抛棄す」と記され⁴²⁾、緑肥としての活用について知識が無く、雑草をそのまま打ち捨ててしまっている農民がいたことを知りうる。

また、陳勇は収穫減の原因として「多く見るに、人纔かに暖かければ便ち種を下し、其の節候尚お寒きを測らず、忽ち暴寒の折く所と為り、萌蘖は凍爛して瓮臭す」と述べており⁴³⁾、ここから農民の間では播種の時期について適切な知識が必ずしも共有されていなかった実情を見て取ることができる。

もう1点陳勇『農書』から挙げておこう。肥料について述べたくだり「人の小便を用うるに生もて澆灌し、立に損壞の見るを多く見る」と排泄物を肥料として扱う際、加工・調整の工程を省いて使用してしまったがためにかえって損害が生じる事例が紹介されている⁴⁴⁾。これも農民の中に肥料の製造法・利用法について知識を欠いている者が一定数含まれているからこその現象であり、農書の内容に反して現実の農村社会では、個々の持つ知識・技術が低い水準にとどまっていたと推測される。

このように農書の内容と農業の現場との間にはギャップが存在するが、それは何も知識の質や情報量のアンバランスだけに起因するものではない。農村には意図的に農書の内容に従わない農民もおり、このような人々の存在もまたギャップを構成する要素であった。

農作業そのものを忌避する農民はその一例である。『黄氏日抄』巻七八、咸淳八年春勸農文には「撫州の勤力する者、耘るに一兩遍を得るも、懶者は全く耘らず。……撫州の勤力する者、斫りて些少の柴草を田に在らしむるを得るも、懶者は全然管けず」と丁寧な農業を心がけ作業に手間を厭わない農民との対比の中で、除草や緑肥の活用といった作業を全く気にかけていない人々について言及する⁴⁵⁾。同様の農民については朱熹も触れており、「土風の習俗大率懶惰にして、耕犁種蒔は既に時に及ばず、耘耨培糞も又た力を尽さず」と各種作業に対する熱心さを欠落させた農民について描写する⁴⁶⁾。

これらの記述はいずれも勸農文の一節であることを考慮すると、ある程

度の脚色は施されていると考えるべきであろう。宮澤知之氏は勸農文の分析を通じて、それを作成する主体が生産活動の阻害と見なしていた要素を抽出するが、その内「飲酒、賭博、怠惰、奢侈など労働意欲の喪失に繋がる個人的精神的要因」は上記の内容に類するものである⁴⁷⁾。すなわち、これらの諸要素を勸農文の筆者は改善すべきものとして否定的に捉えていたわけであり、記述の内容にある程度の強調がほどこされていたことは想像に難くない。

とはいえ、黄震・朱熹共に現実にはありもしない農民をさも存在するかのよう述べていたことは考え難い。勸農文に宮澤氏が指摘するような諸要素が登場するのは、当時勸農文の筆者にとってこれらが社会問題として認識されていたからこそのことである。賭博や奢侈はもちろんこと、これらの他に宮澤氏が列挙される胥吏の不正や詞訴・私販といった行為はいずれも現実に生じていたものであり、その存在が勸農文以外の史料からも確認できることは言うまでもない。こうした点に鑑みるならば、「怠惰な農民」という社会問題だけが当時の社会にあって全く存在せず、勸農文の筆者が思い浮かべる空想の世界の産物と見なすことは考えづらい。従ってこれらの農民は農村内で一定数見かけられ、それに対して地方官は眉を顰めていたと見てよい。

一方で、農作業に従事するものの、農書とは別の価値観に従っているが故にその内容とは異なる対応を取る農民もいた。『中国農村慣行調査』においては

右地では概してどんな順序に植えるか=麦子・稗子を先ず作り後に豆をまく。麦子だけ又は稗子だけ豆子だけを作る土地はない。何れも混作である

何故混作するか=一つだけだとその種作物が出来ないときは全滅する

惧があるから

とのやりとりがなされている⁴⁸⁾。穀物も品種が異なれば栽培の工程はもとより作業の適切な順序・時期なども異なってくるので、混作という方法は決して効率的ではない。また、収穫量を基準にして考えても、高い生産性を有する作物に特化して栽培する方が好ましいが、現実にはそうした栽培スタイルを採用しない農民がいたことをこれらの史料は示している。

現代的な感覚からすると非合理的にしか思えないこの方式を当時の農民がなぜ採用したかと言えば、それは生産の安定性を重視したからであった。『中国農村慣行調査』では混作の理由として「一つだけだとその種作物が出来ないときは全滅する惧がある」と述べているが、これは単一種の栽培による高い生産性よりも、複数の品種の栽培による危機回避を優先させる志向も農民にはあったことを示している。

ここからはセーフティネットの構築が強く意識された生産スタイルが読み取れるが、農書にこのような農民の行動はほとんど記されない。北宋末から南宋にかけての人である曹勛の詩に「豊荒を均しくす」のために耕地の種類に応じて栽培する作物をうまく使い分け、「所以に終歳の間、米を食するも糠に及ばず」と詠うものがある⁴⁹⁾。これも上記のような安定性志向を窺わせるものであるが、これらの史料が全て農書以外のジャンルに属するものであることは指摘しておきたい。

以上に示した農書と現実の間にある距離感についてはイデオロギー性のもたらす影響もあわせて考慮に入れなければならない。農書の編者が儒教的な価値観を背景に持つ知識人であることは上述したが、これを受けて農書の内容は知識人の視界に入る事物、知識人の価値観に合致した行為が中心に据えられた。仮に農民の行動においてその価値観にそぐわないものが見受けられれば、それは非難の対象として言及されるか、意図的に執筆対

象から除外されるかのいずれかである。例えば、大澤氏が指摘したように儒教的価値観の下では売却という利益を追求する行為そのものが否定的に捉えられていることから、農作物の売却にまつわるトピックは農書の中で次第に触れられなくなっていく⁵⁰⁾。

しかし、農民は自身をとりまく環境や状況に応じて様々な経営上の選択を行っていた。農業以外の副業を重視する姿勢もそうした対応の一つとして挙げられ、『中国農村慣行調査』には副業に勤しむ農民の姿が数多く登場する。例えば桑子・杏・桃・梨といった果実を他の農民から仕入れ、それで商売を行う者⁵¹⁾、黍を買い入れて飴の製造を行い、それを都市で売ることによって家計の足しにしている者について言及がある⁵²⁾。

これらの人々に共通することは加工品の製造や収穫物の売買に専従しているわけではなく、いずれも自身の耕地を持ち、農作業と並行しつつ製造・売買に取り組んでいる点である。そして、以下のようなやりとりにも注目したい⁵³⁾。

右は他にも収入の道を立てているか＝住地方的（店の夥計）・抗活的（短工以外の農業労働者）・工夫（短工）・手藝人（木匠・鉄匠・瓦匠等）をなす者あり

右の各仕事を主、自耕を副とする者もあるのか＝皆自耕の方が主

右の各仕事は自耕のみでは生活出来ぬからそうしているのか、又は更に儲けようとしてやつているのか＝前者が多い

店舗経営や加工・製造に従事する人々に対する言及があるが、皆兼業しつつも農業を主たる生業と意識している。そして、兼業を行う理由を「自耕のみでは生活出来ぬから」と経済的な事情に理由を求めている。具体的な状況を想定するならば、これは農業から得られる収穫だけでは家計の維持

は叶わない状況、すなわち耕地の生産性が極度に低い環境にあるか、もしくは所有する耕地の面積がわずかしかない状況に農民が置かれていたことに拠るものであろう。ここからは農家経営の現状と副業との間に密接な関連性が生じていたことを窺うことができ、それを示す史料として上記のやりとりは重要なものと言えよう。

同様の関係性は短工（日雇い労働者）として田植えや収穫作業に従事する状況についても当てはまる。「生計に苦しむ家では何によつて食いつなぎしているのか」という問いに対して「小作したり労力を売つたりするのが多い。短工するのが一番多い。農以外に小売買をするのは四、五戸あり」との回答がなされるのはその一例である⁵⁴⁾。ここでも副業としての商業について触れられているが、加えて小作や肉体労働から得られる収入によって収穫物の不足を補っている点も窺い知れる。

ところで、上記の史料に登場する短工の業務内容には農業に関わりの深いものが多いことから、加工業や小商いのような生業とは分けて扱うべきと見なす向きもあるかもしれない。しかし、自身の耕地に関わる労働とそれ以外の労働という区分から捉えると、両者は労力・時間の使い方において大きな差異があることに気付く。と言うのも、短工は労働の時間帯と作業内容が雇用主に指定されており、被雇用者である農民にこれらについての決定を行う裁量は認められていない。これは自身の耕地で行う農作業より短工による労働を優先せざるを得ない状況を生み出すことになり、結果として前者の農作業はその質を低下させていく。短工の労働には農業に関連するものが多かったが、自耕地での農作業に費やす時間を削いでいるという意味においては他の副業と同じ性質を持っていると言えよう。

短工に限らず各種副業が農業に充てるべき時間を奪っている様子は『中国農村慣行調査』でのやりとりからも窺える。例えば、副業として家・家具・農具を作っていた農民は「暇ある時や頼まれた時に従事」し⁵⁵⁾、ま

た「村民が仕事を頼む時に出かけて行って仕事をしていた」という⁵⁶⁾。大工・木工職人の業務は不定期に依頼が寄せられたが、当然そこでは農作業より加工業の業務が優先される。

中には一年の内、決まった時期に副業に従事している農民もいた。以下のやりとりはそうした農民の一例である⁵⁷⁾。

百姓以外に家の者が何か物を作って売ったり他へ仕事に行つて金儲けすることがあるか=自分は夏頃麦稈帽子を県城の市、陳倉屯の市で買い入れて城内で売る、百姓の冠る帽子を八月節頃済南から買つて来て冬中城内で売る、自分の息子も野菜を買い入れて城内で売ることもある

麦藁帽子を売つて生計の足しにする農民の様子がここから窺えるが、注目すべきは麦藁帽子を各地で仕入れる時期である。この8月が新暦と旧暦(新暦9月~10月)どちらを指すのか判然としないが、いずれにせよこの時期には本来様々な農作業が控えている。

また、『中国農村慣行調査』には棉花の出る時期だけ經紀(仲買人)となる農民も登場する⁵⁸⁾。一般に棉花の出荷時期は8月から11月にかけてのことであるが、それを踏まえると、この農民は農業の繁忙期にあつて經紀の業務に注力していたことにならう。

このように農本商末の立場をとる編者の思惑とは異なり、現実の農民は農業だけにこだわらない経営スタイルをとっていた。上記の史料はいずれも20世紀の記録であり、本来であれば宋元期の農民についても副業・兼業の関わりを検討することが求められるが、残念ながら史料的な制約から具体性を伴った事例の検出は困難である。それでも小説史料から当時の農村の様相を推測することは可能である。

例えば、『夷堅支景』巻1、員一郎馬には自身の耕地を所有しているにもかかわらず「常に人の傭と為る」男が登場する⁵⁹⁾。他にも「人の為に傭耕す」農民の朱七⁶⁰⁾や「貧しきこと甚しく、富家の為に傭耕す」農民の鮑六⁶¹⁾のように、耕地を持ちつつ富農に雇われて生産活動に従事する農民の姿を確認することができる。

『夷堅志』には他にも葉肆を営みつつ小圃を所有する経営者⁶²⁾や農家の生まれであるものの「時時人と屠宰す」る者も登場する⁶³⁾。これらの史料は共に記載が簡略であり、ただちに農民による兼業と見なすことは叶わないが、宋元期にあっても農業以外の労働に従事していた農民が一定数存在した可能性を窺わせるものとして位置づけることはできよう。

ところで、イデオロギー性に関わる問題としてもう1点検討しておくべきことは農業と女性の関わりである。前章でも述べたが、儒教的な男耕女

表2：『中国農村慣行調査』に見える女性の労働

作業内容	出典
除草・収穫	『中国農村慣行調査』1-288
間引き・収穫・塩分取り	『同上書』2-126
収穫（棉花・粟）	『同上書』3-126
苗の選択・水車の番・除草・収穫	『同上書』3-131
収穫（粟）	『同上書』4-114
除草・間引き	『同上書』5-60
除草・収穫	『同上書』5-79
苗の手入れ・乾燥作業（高粱）	『同上書』5-89
苗の手入れ・収穫	『同上書』5-90
除草・間引き・収穫・脱穀	『同上書』5-175
播種・覆土・撒地	『同上書』5-452
施肥・土を埋める	『同上書』5-468

織の価値観に基づき、農書では農作業に従事する女性の姿が描かれることはなかった。しかし、『中国農村慣行調査』を見る限り、農業の現場において女性は農作業に対して一定の関与をしていたと考えるべきである。

ここに掲げた表2は『中国農村慣行調査』に記される農村での女性の労働についてまとめたものである。本表を眺めると、農具を用いた重労働は少ないものの、農作業に携わる女性の姿が多く確認される。表内では除草・間引き・収穫といった作業が高い頻度で登場しており、また苗の選択・手入れといった作業も見受けられるので、作物の栽培期間において女性は幅広く作業に関与していたと言えよう。

話を宋元期に移すと、やはり女性と農作業のつながりを明示する史料は少ない。ただ、大澤氏は小説史料から田植えを行う女性の描写を収集し、男耕女織の世界観とは異なった農村の姿を提示する⁶⁴⁾。

また、詩に示された女性の姿はより具体的である。田嶋美喜氏が採り上げたように⁶⁵⁾宋代においては炎天下散水具の操作に勤しむ女性⁶⁶⁾や頭が草や葉でまみれ、服がほこりと汗で黒くなるまで働く女性⁶⁷⁾など、より過酷な肉体労働に従事する女性が詩題になることもあった。無論、こうした内容を当時の農家女性の平均的な姿を反映したものと見てよいか検討は必要であろうが、農家の中でも貧困層に属する家庭や労働力が限られた家庭であれば、重労働とはいえ女性が動員されていたことは想像に難くない。

このように経済的な階層を始めとした諸条件によって状況は変化し、作業の内容や従事する頻度に差はあったものの、中国の農村にあって女性が農作業を行う光景は珍しいものではなかったと考えるべきである。少なくとも「男耕」という農作業の従事者を男性に限定してしまう価値観は農村社会の現実とは乖離したものであり、従って女性が登場しない農書の内容にも一定の留保が必要とされよう。

「惰農」とは何か ―おわりにかえて

以上、本論では農書がいかなる性格を持つ史料なのか検討を行ってきた。農書とそれ以外の史料とでは農業・農民に対してそれぞれ異なった印象を受けるが、それは農書の内容と農業の現場との間にあるギャップの反映でもある。そして、こうしたギャップの背景にあるものを探っていくと農書が持つ性格に行き着く⁶⁸⁾。歪みとでも称すべきこの性格は、農書が各種性格の制約下にあったが故のこととして捉えるべきであろう。

これらの点を踏まえると、農書の内容を当時の農業・農民像の忠実な反映と位置付けることはとてもできない。史料として農書が有効性を発揮するとすれば、それは当該時期における最高水準の農業技術について検討する場、もしくは知識人が抱く農業観の把握を目的とする場においてであろう。そうでなければ、上記した現場の実態を意識しつつ史料批判を行うことがまず求められる。この史料批判にまつわることとして、最後に数点指摘を行うことで本論を締めくくることがしたい。

さて、農書の性格について改めて考えてみると、これらが従来の農業史研究に見られた問題点と密接にリンクしている点に気づかされる。例えば、先進性に対する強い関心である。従来の農業史研究においては、研究の対象を各時代の農業技術や生産力に集中させる傾向があったことは否めない。技術の進展・生産力の向上を通じて時代の変化を読み取ろうとする意図がここでは見出されるが、農書はそうした要望に応えるものとして活用されてきた。

しかし、農書に見られる技術・生産力のあり方はその時代における農業の平均像たりうるのかという問いがこの場において発せられることは少なかった。むしろ、啓蒙性を強く持ち、最高水準の技術・生産性が示されて

いた農書と先端的な技術や高い生産性に目が行きがちであった研究者との間には相性の良さが生じていたと言って良い。こうした親和性が存在する以上、研究者の中から上記のような問いはなかなか生じにくい。現実の農業・農民の様相とは異なった農書の内容が一般性を獲得した理由をここに見ることができるが、私たちはこうした構図からの脱却を図ることが求められる。農書の持つ先進的な側面にはいまま少し注意が払われても良からう。

もう一つ問題点を挙げておくと、研究者の間で共有されていた分業的かつ固定的な生業観がある。現代社会では経済の発達に伴って分業が著しく進んでいるが、当然そうした環境は多かれ少なかれ私たちが持つ生業へのイメージに影響を与える。一方で、農書がイデオロギー性を強く持つが故に農民は農業のみを手掛ける存在として描かれてきたが、こうした農書の性格と私たちの生業観もまた相性の良さを見せていた。ある意味現代社会に生きる私たちだからこそ農書の提供するイメージは抵抗感なく受け入れられたとも言いうる。

しかし、実際の農民はこうした生業観とは縁が薄かったのではなかろうか。民俗学の研究者である安室知氏は、生業を把握するに当たり個々の生業を独立したものと見るのではなく、生業間の関係性を重視する視点を提唱されている⁶⁹⁾。安室氏の議論は日本社会を念頭においたものではあるが、こうした複合的な理解は傾聴に値するものであろう。そして、この観点に基づくならば、農業にまつわる要素のみをもって農民の総体を捉えようとする立場自体が意味をなさないことになる。

一方、本論の検討からは、農書以外の諸史料を通じて副業に精を出す農民の姿を確認することができた。こうした農民の姿を目にした以上、中国における複合的な生業のあり方から目をそらすわけにはいかない。総じて述べれば、農業のみに意を用いた理解の深化が農民という存在の十全な把握につながらないことは自明であるし、農書の内容のみをもって農業・農

民に対するイメージを構築することは危険を伴う行為でもある。むしろ、私たちは知識人の示す農業・農民像とは一定の距離を置くことにこそ気を配るべきであろう。

以上の点は農書以外の史料と接する際にも意識する必要があるし、中にはイメージの修正を図らねばならない記述も生じてくる。例えば、史料上において「惰」・「懶」と評される農民の行動について、私たちはどのように解釈すべきなのか。以下「惰農」と称される人々にまつわる記載をいくつか再検討してみよう。

『止斎先生文集』巻44、桂陽軍勸農文では、まず「閩浙の土、最も是れ瘠薄にして、必ず鋤耨すること數番有り、加うるに糞を以て漑ぎ、方めて良田と為る」と浙江・福建における一般的な状況が述べられ、ついで桂陽軍について「此の間施糞に待まず、鋤耨も亦た希なり。種うる所の禾麦、自然に秀茂し、則ち其の土の膏腴たること閩浙に勝如するを知る」と耕起や施肥といった作業がおろそかにされていることについて指摘がなされる⁷⁰⁾。

本史料の末尾は「惰農と為りて坐して豊歉を視る勿れ」と締めくくられ、理解しがたい者へ向けられた眼差しが強く感じられる。確かに農業に対して最大限の時間と労力をかけ、可能な限り収量を高めていく方向性を是とする立場からすれば、桂陽軍の農民が豊かさへの追求を放棄した非合理的な存在として映ずるのも無理はない。

ただ、注意すべきは農民が農事に熱心さを欠く背景として当該地域の土壌が大変肥沃であったという事情が存した点である。栽培している作物がさして手をかけずとも実をつけて収穫に至る、そうした状況を可能にする程度の肥沃度を耕地が有していたが故に、耕起や施肥への熱意に必要性を覚えなかった農民の心性をそこに見てとることは可能であろう。

農事に費やす時間を削減した農民がその分生じた余剰の時間を何に充て

たのか、史料から読み取ることはできない。副業に従事していたかもしれないし、余暇に費やしていたかもしれない。それは定かではないし、これ以上追究することも叶わないが、少なくともここからは、己の時間全てを農作業に充てなければならぬとする価値観が農民の間で共有されていたとは限らず、むしろ使用可能な時間全てを農事に充てるという生産スタイルは農民にしてみれば数多くある選択肢の中の一つに過ぎなかったという実態が垣間見える。

私たちは農書の内容になじみすぎてしまったのか、農業に専心する存在として農民を理解してしまいがちである。しかし、現場の農民が有していた心性や農業の現場に広がる論理というものを意識しつつ諸史料に接することで、異なった社会像が眼前に広がってくることに気づく必要はあろう。

農書に登場する農民についても同様のことが言え、編者の評価をそのまま受容するのではなく、筆致の底に潜り込んでいる農民の心性を積極的に読み取ることによって異なった理解が可能になる。清代の農書ではあるが、『補農書』稻秧・麦秧に「種麦の勞を苦とし、撮子の逸に耽る」農民が登場する。播種作業をおろそかにするため「甚しきは時を失うに至り、春花は望を絶つ」と春先の作物を栽培する貴重な機会を失う農民を編者は「惰農」と称し、「愚なるかな」と厳しく批判する⁷¹⁾。

ただ、こうした史料についても編者の立場から一旦距離を置いて捉えなおしてみる価値はある。この農民がなぜ農務に注力しなかったかと言えば、「薄収に甘心」していたからであるという。たとえ収量は低い水準にとどまっても構わないとする農民の意思をそこに読み取ることができるが、こうした判断がなされる背景を探っていくと、必ず怠惰な性格に行き着くとは限らない。この農民が他の収入源を持ち、農作業に手間暇をかけない、あるいはかける必要のない状況が存した可能性も残されていよう。

以上、いくつか史料を見る限り、「惰」・「懶」と称される農民に対しては異なった評価の与えられる選択肢についても意識せねばならない。これまでの検討を踏まえた上で整理するならば、その背景には農書と現場の、換言すれば理想と現実の対立が見出される。農書に描かれるものは作業に多くの時間と労力を投入する農民の姿であるが、これは儒教的・農本主義的な価値観に基づく理想的な農民像である。一方で、農書以外の史料から断片的に窺えるものは、多様な生業の中で生産の方向性を定め、農業に拘泥しない農民という現実である。こうした農民の心性の基盤をなすものは現場に立つ者が持つ合理性であり、そこに儒教的な色合いは薄い。むしろ、安室氏が言うところの複合生業論的な感覚がそこには見出される。

「惰農」の存在が示唆するのは、農本主義的な図式の中だけで史料を理解することがはらむ危険性である。無論、これは「惰」・「懶」といった表現が用いられる事例に限られた話ではない。例えば、朱熹が記した文章に、耕起・播種を行うべき時期にあつてなお耕起が行われていない状況を憂うものがあるが⁷²⁾、こうした記述についても上記の諸史料と同様のことが言える。そこでは怠惰な心情に起因する農民の行動を見てとる解釈も可能であり、また他から得られる利益を優先させるため農作業の時期を逸するのはやむを得ないとする論理を読み取る可能性も否定できない。

ともすれば私たちは「農業だけを行う農民」像に誘導されて史料を理解してしまいがちであるが、そうした理解の道筋は必ずしも農業・農民の実像へ至るとは限らない。農村社会には農業に専心する農民に加えて、農業を主たる生業と意識しつつも副業に手を染めていた農民もみられたし、怠惰な農民もいた。そして、それらの農民の姿を史料から読みとるためには、現場の農民にとっての合理性、すなわち、農業に拘泥するのではなく、自身の生存・生活の維持を第一義としつつ数多く用意された選択肢の中から最適なものを選び取る合理性を視界に入れておく必要がある。

以上、本論では宋元期の史料を中心に扱って立論を試みたが、20世紀の史料も用いつつ傍証を試みた箇所も多く、その実証性は甚だ乏しい。その意味でより信頼のおける農業・農民像を構築するためにはさらなる検討が必要であるが、とは言えここで提示した農民の立場・論理といった視点には、農業史研究にまつわる多様なアプローチの1つとして扱うだけの価値はあろう。農業史研究の進展にとっては研究者に相対的なスタンスが求められ、また農書の活用についても同様の立ち位置からの接し方が必須とされている。そのことを私たちは意識しておかねばならない。

注

- 1) 農書はこれだけ人々に知られた存在でありつつも、実のところ具体的な定義がなされることは少ない。そうした背景には、史料で扱われる内容や形式にかなりの幅の広さがあり、明確な定義が困難な実情を見出すべきなのであろうが、差し当たり本論では王毓瑚氏による「農業生産技術以及与農業生産直接有関的知識的著作」（『中国農学書録』農業出版社、1964、凡例）とする定義を念頭に置いて農書を論じていきたい。
- 2) 天野氏による農書の研究は数多く残されているが、差し当たり宋元まつわるものとして、「宋、陳勇『農書』について」（『東方学』32、1966）、「陳勇の『農書』と水稲作技術の展開（上）」（『東方学報』19、1950）、「元の王禎『農書』の研究」（藪内清編『宋元時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所、1967）、「元、司農司撰『農桑輯要』について」（『東方学』30、1965）、「『農桑輯要』と棉作の展開（上）」（『東洋学報』37-1、1954）、「元の魯明善『農桑衣食撮要』（『農業総合研究』17-3、1963）を挙げるにとどめておく。
- 3) 西山武一「齐民要術解説」（『校訂・訳注齐民要術』上、東京大学出版会、1957）。
- 4) 周藤吉之「南宋の農書とその性格」（『東洋文化研究』14、1957、のち補正して『宋代経済史研究』（東京大学出版会、1962）に再録）。
- 5) 大澤正昭『陳勇農書の研究』（農山漁村文化協会、1993）。
- 6) 寺地遵「中国における農業観の歴史的変遷」（『史学研究』95、1966）。
- 7) 注5前掲書。
- 8) 章楷『中国古代農学家和農書』（上海人民出版社、1987）。
- 9) 天野元之助『中国古農書考』（龍溪書舎、1975）。なお、王氏の著作については注1前掲書を参照。
- 10) こうした研究から派生した成果として渡部武『王禎農書』農器図譜について』（渡部武『王禎

農書』に見える中国伝統農具の総合的研究』平成13年度～15年度科学研究費補助金研究成果報告書、2004)も挙げておきたい。本研究は王禎『農書』の挿絵について版本ごとに整理を行い、系統ごとの特徴を明らかにしているが、こうした作業は単に版本の系統に関する再検証にとどまらず、王禎『農書』に前後する各農書との関連性にも踏み込んだ広がりを見せている。

- 11) 宮紀子『『農桑輯要』からみた大元ウルスの勸農政策(上)』(『人文学報』93、2006)、「同(中)」(『人文学報』95、2007)、「同(下)」(『人文学報』96、2008)。
- 12) 市村導人「中国農書と知識人」(宋代史研究会編『宋代史料への回帰と展開』汲古書院、2019)。
- 13) 大澤正昭「元代までの農書における作物売買記事」(大澤正昭・中林広一編『春耕のとき』汲古書院、2015)。
- 14) 拙稿「宋代農業史再考」(『東洋学報』93-1、2011、のち拙著『中国日常食史の研究』(汲古書院、2012)に再録)。
- 15) 陳勇『農書』汪綱跋
高沙素号沃壤、中更兵火、土曠人稀。……余曩得農書一帙、凡耕桑種植之法、纖悉無遺。竭來守此、視事之初、急鋟諸木、以為邦人勸。
- 16) 『宋会要輯稿』食貨63-167
(天禧4年8月22日)利州路轉運使李昉上言、近觀勅命、就差提点刑獄官、充勸農使、以見國家務農之道。臣三紀外任、每見州縣之民多不諳會播種。覽四時纂要・齊民要術、並是古書備陳耕耨栽植之法。又觀先降農田勸、条貫甚精、蓋止約於刑禁、顯諸程式、復置常平倉、亦慮其乏絕。今請取此二書雕印、頒付諸路勸農司、委轉運勸農使副、每偶巡歷州縣常加提舉勸農詔、令館閣校勘雕印、賜與諸處。
ただし、この時刊行された農書は積極的に活用されることはなかったようである。詳細は渡部武『『四時纂要』訳注稿(一)』(『安田学園研究紀要』19、1979)、3ページを参照。
- 17) 陳勇『農書』朱抜跋
農者天下之大本也。守令以勸農為職、每歲仲春舉行故事、其為告戒之文、非不勸且至矣。曾未聞以種藝之法曉之者。予家歲全真子農書、纖悉備具、每愛其功於農務。竭來姚江、兩出郊勸農。且相刻此書、以示邑人。
- 18) 朱抜については詳細を知りえないが、寺地遵氏は嘉定5年から7年にかけて余姚県の知事を務めた朱拂とする。詳細は寺地「陳勇『農書』伝本攷」(広島史学研究会編『史学研究五十周年記念論叢 世界編』福武書店、1980)を参照。
- 19) 注11前掲論文。
- 20) 陳勇『農書』洪真州題後
紹興己巳、自西山來訪予于儀真。時年七十四。出所著農書三卷、曰、此吾間中事業、不足拈出、然使沮溺耦耕之徒見之、必有忻然相契處。樊遲請學稼、子曰、吾不如老農。先聖之言、吾忘也。樊遲之學、吾事也。是或一道也。僕喜其言、取其書、讀之三復、曰、如居士者、可

謂士矣。因以儀真勸農文附其後、俾厲邑刻而伝之。

- 21) 王文誥輯注・孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、1982）卷38、秋馬歌并引 過廬陵、見宣德郎致仕曾君安止。出所作禾譜。
- 22) 『劍南詩稿』卷67。
- 23) 『直齋書錄解題』に載せる農器譜の条（卷10、農家類）を参照。なお、曾安止及び曾之謹については曹樹基「〈禾譜〉及其作者研究」（『中国農史』1984-3）に詳しい。
- 24) 陳勇『農書』序

僕之所述、深以孔子不知而作為可戒、文中子慕名而作為可恥、与夫葛抱朴・陶隱居之述作、皆在所不取也。此蓋叙述先聖王撙節愛物之志、固非騰口空言、誇張盜名、如齊民要術・四時纂要、迂疎不適用之比也。実有補於來世云爾。
- 25) 大澤氏が注5前掲書で指摘するように、これら農書に対する評価の内容から陳勇の実見を疑問視する見解もあるが、大澤氏は『農書』の内容を吟味した上でこうした疑問への賛同を留保する（102ページ、注7）。また、『齊民要術』や『四時纂要』が華北の農業技術を前提とした農書であることを鑑みるならば、華中の農業に適用しがたい内容も多々含まれ、それが陳勇の「用に適さざるの比」という評価につながったと見なすことも可能であろう。これらの点を踏まえ、本論では陳勇は上記の農書を実見していたと考えたい。
- 26) 市村氏によれば宋代に刊行された農書が死蔵され、人々の目に触れる機会が無かったという（注12前掲論文、55ページ）。こうした指摘は農書をめぐる現状を考える上で大変重要なものであるが、一方、ここで示したように知識人間のネットワークの下で農書の受贈や書写などが行われていた状況も看過できず、この多様な側面をいかに位置付けるかは今後の課題となろう。
- 27) 中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』（岩波書店、1952-58）3巻、54ページ。以下、本書を引用する際は書名と巻数・ページ数のみを記す。
- 28) 『中国農村慣行調査』4巻、16ページ。
- 29) 『中国農村慣行調査』4巻、64ページ。
- 30) 『中国農村慣行調査』4巻、16ページ。
- 31) 張朋園「劣著「清代教育及大衆識字能力」」（『中央研究院近代史研究所集刊』9、1980）。張氏の指摘はロウスキ氏の著作（Evelyn Sakakida Rawski, *Education and popular literacy in Ch'ing China*, University of Michigan Press, 1979.）に対する書評の中でなされたものである。ロウスキ氏は19世紀末の民間社会における識字率を男性について30~45%、女性について2~10%と見積もるが、張氏はこれを高すぎるものとして批判した。各種史料の検討を行った中島楽章氏もまた同様の見解をとることから（『村の識字文化』『歴史評論』663、2005）、『中国農村慣行調査』で農民が示す数値もただちに退けられるような性質のものではないと考えられる。
- 32) 『中国農村慣行調査』4巻、114ページ。
- 33) 王禎『農書』農器図譜集之3、鋒

近世農家、不識此器、亦不知名。茲特錄其功用、知為不可廢也。

34) 王禎『農書』農器図譜集之4、耘盪

真西山言幽詩農事之叙、至耘田則曰、暑日流金、田水若沸、耘籽是力、稂莠是除、爬沙而指為之戾、僂僂而腰為之所。此耘田之苦也。今睹此器、惜不預伝以濟彼用。茲特圖錄、庶愛民者播為善法。

35) 王禎『農書』農桑通訣、耙勞篇

今当耕種用之、故附于耙勞之末。然南人未嘗識此、蓋南北習俗不同、故不知用撻之功。至于北方、遠近之間、亦有不同、有用耙而不知用勞、有用勞而不知用耙、亦有不知用撻者。今并載之、使南北通知、隨宜而用、使無偏廢、然後治田之法、可得論其全功也。

王禎『農書』農器図譜集之3、鏵

鏵與鏡頗異、鏡狹而厚、惟可正用、鏵闊而薄、翻覆可使。老農云、開墾生地宜用鏡、翻轉熟地宜用鏵。蓋鏡開生地着力易、鏵耕熟地見功多、然北方多用鏵、南方皆用鏡。雖各習尚不同、若取其便、則生熟異器、当以老農之言為法。庶南北互用、鏡鏵不偏廢也。

王禎『農書』農器図譜集之4、耨鋤

北方陸田、拳皆用此。江淮間雖有陸田、習俗水種、殊不知菽・粟・黍・稷等稼耨鋤鍤布之法、但用直項鋤頭。刃雖鋤也、其用如斲、是名鏹鋤。故陸田多不豐収。今表此耨鋤之効、并其制度、庶南北通用。

36) 注13前掲論文。

37) 王禎『農書』農桑通訣、勸助篇

後世勸助之道不明、其民往往舍本而趨末。故諺曰、以貧求富、農不如工、工不如商、刺綉紋不如倚市門。此說一興、天下之民、男子棄耒耜而爭販鬻、婦人舍機杼而思歌舞、墮遊末作、習以成俗。

38) 王禎『農書』農器図譜集之16、蚕繅門

蚕繅之事、自天子后妃、至于庶人之婦、皆有所執、以供衣服。

39) 例えば、農器図譜集之12田廬や集之14田漏など。

40) 陳旉『農書』天時之宜篇

今人雷同、以建寅之月朔為始春、建巳之月朔為首夏。殊不知陰陽有消長、氣候有盈縮。冒昧以作事、其克有成耶。設或有成、亦幸而已。其可以為常耶。

41) 陳旉『農書』祈報篇

今之從事於農者、類不能然。借或有一焉、則勉強苟且而已。烏能悉循用先王之典故哉。其于春秋二時之社祀、僅能舉之、至于祈報之禮、蓋蔑如也。其所以頻年水旱、蟲蝗為災害、饑饉荐臻、民卒流亡、未必不由失祈報之禮、而置神乏祀、以致其然。

42) 陳旉『農書』薶耘之宜篇

詩云、以薶荼蓼、荼蓼朽止、黍稷茂止。記禮者曰、仲夏之月、利以殺草、可以糞田疇、可以

美土疆。今農夫不知有此、乃以其耘除之草、拋棄他處、而不知和泥溼濁、深埋之稻苗根下、漚罷既久、即草腐爛、而泥土肥美、嘉穀蕃茂矣。

43) 陳勇『農書』善其根苗篇

多見人纔暖便下種、不測其節候尚寒、忽為暴寒所折、萌蘖凍爛益臭。其苗田已不復可下種、乃始別挾白田、以為秧地、未免忽略。如此失者十常三・四、間歲如此、終不自省、乃復罪歲。誠愚癡也。

44) 陳勇『農書』善其根苗篇

若不得已而用大糞、必先以火糞久窖漚、乃可用。多見人用小便生澆灌、立見損壞。

45) 『黃氏日抄』卷78、咸淳八年春勸農文

撫州勤力者、耘得一兩遍、懶者全不耘。……撫州勤力者、斫得些少柴草在田、懶者全然不管。

46) 『朱文公文集』卷99、勸農文

土風習俗大率懶惰、耕犁種蒔既不及時、耘耨培糞又不盡力。

47) 宮沢知之「南宋勸農論」(中国史研究会編『中国史像の再構成』文理閣、1983)、223-224 ページ。

48) 『中国農村慣行調査』5巻、145 ページ。

49) 『松隱集』巻22、山居雜詩

高原取菽麥、下田插禾秧 田頭与地尾、一一意所量
躬耕辨好恰、挾種均豊荒 所以終歲間、食米不及糠

50) 注13前掲論文。

51) 『中国農村慣行調査』4巻、403 ページ。

52) 『中国農村慣行調査』4巻、247 ページ。

53) 『中国農村慣行調査』5巻、150-151 ページ。

54) 『中国農村慣行調査』5巻、150 ページ。

55) 『中国農村慣行調査』4巻、4 ページ。

56) 『中国農村慣行調査』4巻、403 ページ。

57) 『中国農村慣行調査』4巻、497 ページ。

58) 『中国農村慣行調査』3巻、326 ページ。

59) 『夷堅支景』巻1、員一郎馬

荆門軍長林景民蹇大、居郭北七八十里間。有一女、納同里鄒亞劉贅婿。鄒愚陋不解事、薄有賞業、且常為人傭、跋涉還道在家之日少。蹇拋其屋、耕其田、又將致諸死地而掩取其產。

60) 『夷堅支景』巻3、大錢村

湖州城外十八里曰大錢村、乾道十年春、農民朱七為人傭耕。

61) 『夷堅志三補』楊樹精

濮州臨濮縣徐村農民鮑六、貧甚、為富家傭耕、嘗遣往東阿、兩月未返。

62) 『夷堅支乙』卷7、張二大夫

張二大夫者、京師医家、後徙臨安。官至翰林医痊免退、居吉州、啓業肆、技能不甚高、而一意牟利、累資数万緡。屋後小圃、広袤不能十丈、日往縱歩、忽担牆頽仆、正压右足、腕折骨破、痛不堪忍。

ただし、この小圃が葉草の栽培を目的とした耕地である可能性も考えられることから、薬局経営と農業の兼業を窺わせる事例として適切に判断することは叶わない。

63) 『夷堅志補』卷3、檀源唐屠

樂平県檀源民唐富、本農家子、而亦時時与人屠宰。……從此不復鼓刀、專治田業。

64) 大澤正昭「唐宋時代の生業とジェンダー」（小浜正子ほか編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会、2018）。

65) 田嶋美喜「宋代の小農経営における女性労働」（中国女性史研究会編『論集中国女性史』吉川弘文館、1999）。

66) 『閩風集』卷3、自婦耕篆哇兒村婦有摘茶・車水・売魚・汲水・行饅・寄衣・舂米・種麥・泣布・売菜者作十婦詩

田頭車水婦、挽水要流通 烏帽掀炎日、青裙鼓晚風
翻翻循故歩、踏踏似虚空 聴取勞歌意、生身莫嫁農（車水）

67) 『濟南集』卷3、田舎女

田家女兒不識羞、草花竹葉挿滿頭 紅眉紫襜青絹襖、領頸麤黚流黑油
日午担禾上場曬、也喜年豊欲還債 傭工出力当一男、長大過笄不会挿
有者四十猶無家、東村定昏來送茶 翁嫗喫茶不肯嫁、今年種稻留踏車

68) 市村氏は農書の検討を経て、国家と民間の間にある目的・ニーズの差異、国家が重視する農書と民間が重視する農書の間にある認識のズレを提示するが（注12前掲論文、55ページ及び63ページ）、こうした構図は本論が示した農書と現場の間に発生するギャップと一定の関連性を持つものとして捉えられよう。

69) 安室知『日本民俗生業論』（慶友社、2012）。

70) 『止齋先生文集』卷44、桂陽軍勸農文

閩浙之土、最是瘠薄。必有鋤耜數番、加以糞溉、方為良田。此間不待施糞、鋤耜亦希。所種禾麥、自然秀茂、則知其土膏腴勝如閩浙。然閩浙上田収米三石次等二石、此間所収却無此數。当是人力不到、子課遂減。奉勸自今更加勤勉、勿為惰農坐視豊歉。

71) 『補農書』稻秧・麥秧

凡事利必兼利、害必兼害。惰農苦種麥之勞、耽撮子之逸、甘心薄収。甚至失時、春花絕望。愚矣哉。

72) 『朱文公文集』別集卷10、取会諸県知県下郷勸諭佈種如何施行事

使軍契勘、先印給文榜、發下三県、曉諭郷民、將田土趁時犁翻、多種二麦。今詢問得、除種
麦田地外、尚有未犁田地去处稍多、及已耕翻田、郷民又不趁時墾事、兼相去交春日逼、切慮
農事失時。

付記：本稿は2017年8月に行われた宋代史研究会夏合宿にて報告し、その後、2018年3月に宋代史
研究会の編集する論文集に寄稿した経緯を持つものである。その際、編集委員会の判断により本
稿の掲載は見送られたが、成稿に至るまでの間、報告の場における出席者や編集委員より様々な
コメントを頂戴しており、それを踏まえた修正を施すことができた。この場を借りてコメントを
寄せていただいた諸氏にはお礼申し上げたい。